

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

July 2024 vol.39



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「描く人、安彦良和」／特別展「石見生まれのメカデザイナー 山根公利」
どう楽しむ? —美術館でのアニメ、漫画の展示と鑑賞—

企画展「石岡瑛子 I デザイン」
純化を希求するプロセスの先に

東京大学史料編纂所一般共同研究の第1回研究会の開催
益田家文書にみる益田家伝来品の調査・研究

39



安彦良和「ジャンヌ」 本文原稿より 1996年 © 安彦良和

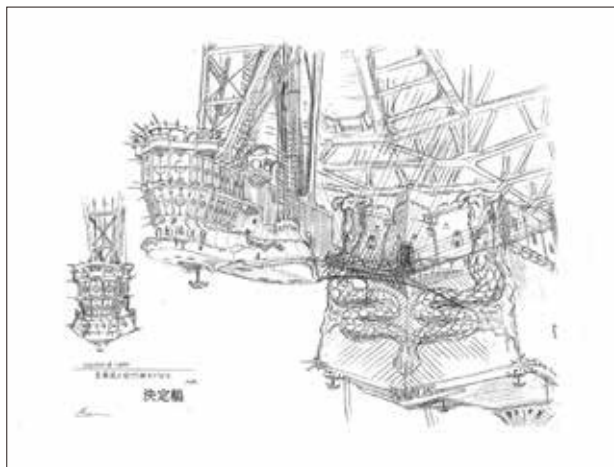
企画展「描く人、安彦良和」／特別展「石見生まれのメカデザイナー 山根公利」

企画展：2024年9月21日(土)～12月2日(月)／特別展：2024年9月14日(土)～12月2日(月)

休館日：毎週火曜日 開館時間：9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)



A



B

A. 安彦良和
『機動戦士ガンダム』
(劇場版・1981年公開)
宣伝ポスター用イラスト原画
© 創通・サンライズ

B. 山根公利
『エスカフローネ』
黒龍族の飛行船の Gondra
決定稿
1999年
© サンライズ・バンダイビジュアル

どう楽しむ？ — 美術館でのアニメ、漫画の展示と鑑賞 —

この秋、当館では、アニメと漫画の世界で合わせて約50年のキャリアを築いてきた安彦良和と、アニメ作品のメカデザイナーとして約30年にわたり活躍する山根公利の展覧会を開催する。

しかし美術館は、アニメや漫画の鑑賞に適した場ではない。数十分から数時間にわたる映像を何作も見るのは不可能だし、展示できる漫画原稿の数には限りがある。では何をどう楽しめばいいのか、疑問に思う方にここでポイントを紹介したい。

まず、作家の個展であることに意味がある。絵画など他の分野にも共通することだが、初期作から最新作までが一堂に会すると作風の変遷や、よく知られた作品以外にどんな仕事をしてきたかを見通せる。同時に、長いキャリアに通底する特色を探ることもできる。

さらにアニメに関していえば、作家の創意工夫、そして「本人の絵」が見られるところに意味がある。アニメ制作は多くのスタッフによる共同作業であるため、どの部分が誰の手によるものかが分かりにくい。展覧会ではキャラクターやメカの設定画を中心に、絵コンテなどアニメの元になった様々な「絵」を展示する。アニメ制作のデジタル化が進んでいることから、直筆の資料は今後、貴重な文化財にもなっていくと思われる。

1970-80年代、日本のアニメが子供向けの媒体から幅広い世代が享受するエンターテインメントへ発展したのと歩調を合わせるように、安彦の人気は高まった。とりわけ、主人公だけでなく敵役にも容姿端麗な「美形キャラ」を生み出したことは、日本のアニメ人気を支えるキャラクター文化において大きな意味を持つ。また、映画の宣伝ポスター(図1)やレコード、ビデオソフト等のジャケット用のイラストは重厚かつ華麗な作品が多く、ファンならずとも魅了されることだろう。展覧会ではこうした原画を多数紹介する。

一方の山根は、『カウボーイビバップ』などの参加作品を経てアニメの表現にコンピューターが導入される制作現場を経験すると同時に、インターネットの発達を機に、働く場を東京から郷里の島根に移した。表現だけでなく働き方においてもデジタル化を取り入れた作家として注目される。

また、山根は主役ロボットだけでなく、宇宙船や飛行船、車輛など「乗り物」や「居住スペース」という性格を持つメカのデザインを得意とする(図2)。アニメを見る際にはストーリーやキャラクターの言動に集中してしまうものだが、その芝居の舞台を支える仕事にも注目したい。展覧会では、安彦良和監督からの指示(『機動戦士ガンダム THE

ORIGIN])や、富野由悠季監督の絵コンテに合わせて山根が描いたメカのディテール(『Gのレコンギスタ』)なども紹介する。

最後に、漫画について触れておく。安彦は1990年代はじめに専業漫画家となった時点で、すでに漫画家としての実績と多数のファンを得ていた。そのため、連載ではなく描き下ろしで依頼されることもしばしばあった。原稿の形式や時間の制約が少ない描き下ろし作品の原画は、展覧会の見どころの一つである。

表紙掲載の図版は、全ページが透明水彩による着色という驚くべき手法で描かれた『ジャンス』の1ページである。ここではアニメのように人物の顔や服をそれぞれの色で塗り分けるのではなく、ページ全体の色調を黄褐色に統一している。別の場面では緑、また別の場面では赤など、物語に合わせた色の選択は、演出手法の一つとなっている。また、この淡い彩色は、安彦漫画の肝である線描を際立たせるのに有効な技法でもある。フキダシに入らない登場人物の独白は印刷の過程で後から加えられるため、原稿には文字が記されていない。絵画と漫画のあわいに位置するこの絵の魅力を、ぜひ会場で堪能してほしい。

(川西由里 当館専門学芸員)

「石岡瑛子 Iデザイン」

2024年12月14日(土)～2025年2月24日(月・振休)

休館日:毎週火曜日、年末年始(12月29日～1月3日) 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

企
画
展



図1

図1. 石岡瑛子 © Kazumi Kurigami 1983

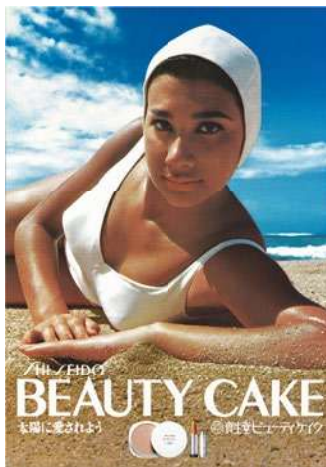


図2

図2. 「太陽に愛されよう 資生堂ビューティケイク」資生堂ポスター 1966年

図3. 「西洋は東洋を着こなせるか」PARCOポスター 1979年



図3

純化を希求するプロセスの先に

この冬開催する企画展「石岡瑛子 Iデザイン」は、グラフィックや舞台美術、映画の美術や衣装、書籍の装丁、展覧会やコーポレート・アイデンティティのディレクションなど、多分野でその才能を発揮したデザイナー、石岡瑛子(図1)の仕事を紹介する展覧会だ。石見美術館では2020年開催の企画展「ファッション イン ジャパン」において、石岡の最初期の作品の一つである資生堂での仕事(図2)や、渋谷がファッションや文化の生まれる街となる重大な要因となったパルコの広告ポスター(図3)を紹介した。今回はこれらに加え、全体で約500点の作品を展覧し、石岡の仕事を探る。

「I(アイ)」というのは「私」のことで、2005年に刊行された石岡の単著『私デザイン』(講談社)にも重なるタイトルである。石岡のキャリアは、経験のない分野でも依頼を受けて飛び込み、誰も見たことがないような表現を残すことの連続だった。展覧会では、仕事において貫かれた「私」という意識に注目し、石岡の言葉と作品を共に展覧することで、その情熱や創造性に迫ろうとする。

石岡が言う「私」とは、一体どういったものだろうか。前述の著作に、それを考えるヒントとなる言葉がある。ここで少しみてみたい。まずは「まえがき」の中にある以下の言

葉だ。あらゆる分野で急速にデジタル化が進んでいた2005年の状況を踏まえ、表現し続けるための心持ちとして述べている。

このような時代をサヴァイブして行くために最も大切なことは、内側から湧き上がってくるほんとうの『自分力』を培うことかもしれない
(「まえがき」、p. 7)

「ほんとうの自分」は、己の内側にあって外にはないのだという石岡の信念がまず見える。同時に、水が地下深くから湧き上がってくるような神秘性、不思議さ、自分ではコントロールできないものという感覚を、「ほんとうの自分」に持っているようにも思われる。そう考えれば、この言葉には、制作に対する石岡の真面目さと謙虚さが凝縮されているとも捉えられるだろう。これを踏まえて「あとがき」に目を移すと、「ほんとうの自分」と出会うためのプロセスが、いかに過酷で孤独かが理解される。

準備が終わり、私がなすべき役割やテーマの内容をきっちり把握すると、それから私ひとりの空間に入って、白紙に向かって正座する。(中略)

はじめは、白いキャンバスを前にした画

家や、粘土の塊を前にした彫刻家に似ている。一日中家に閉じこもることもしばしばだし、気がついてみると1週間こもりきりで考えていることもある。(中略)

肉体の五感(今では六感も含めて)を研ぎ澄ましておいて、二十四時間それぞれ1日のはじまりから終わりまで、見たもの、聞いたもの、触れたものなどが体内に蓄積されていく。そして行動を起こす段階になると、その吸収されたエッセンスが覚醒し攪拌されて、脳の中に指令を出すのではないか、というのが私の実感である。

(「あとがき」、pp. 470-471)

研ぎ澄ます。集中する。とにかく手を尽くして自己の内側に潜っていく。そのためにはノイズになりそうなものは全て削ぎ落とす。純化を希求するプロセスに耐えた先に、ようやくみえる一筋の光のような高純度の「私」が顔を見せるまで、諦めない。アーティストは誰しもこうした側面を持つかもしれない。しかしその純度で石岡は圧倒的なのであり、自らを磨き続けられることもまた、石岡の才能そのものと言えるだろう。展示室ではそんなアーティストの核心に触れる体験を楽しんで欲しい。

(廣田理紗 当館専門学芸員)

東京大学史料編纂所一般共同研究の第1回研究会の開催

益田家文書にみる益田家伝来品の調査・研究

本稿筆者は昨年度、東京大学史料編纂所「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」一般共同研究(2024年度実施)へ応募し、その採択を受けた。研究課題名は「益田家伝来品の伝来・伝世に関する文書の調査研究」である。本年度はその研究事業を進めており、2024年6月8日(土)には第1回研究会がグラントワ講義室で開催された。本稿ではその報告を行いたい。

益田家は、中世には石見国益田を本拠とし、関ヶ原の合戦の後には長門国須佐へ移り、近世を通じて萩藩毛利家の永代家老として活躍した家柄である。同家には、総数1万8千点余りの武家文書である「益田家文書」のほか、貴重な美術工芸品が多数伝わった。

本共同研究は、益田家伝来品の伝来・伝世の経緯を物語る文書を調査研究し、可能な限り益田家伝来品の全体像を解明することを目的としている。

共同研究員は次の6名である(敬称略、50音順、研究代表は角野広海)。

小山弓弦葉(東京国立博物館)
重田麻紀(須佐歴史民俗資料館)
角野広海(島根県立石見美術館)
中司健一(益田市歴史文化研究センター)
西田友広(東京大学史料編纂所)
森 道彦(京都国立博物館)

第1回研究会では、まず本稿筆者により「共同研究の概要と今後の方針」と題した報告がなされ、現存する益田家伝来品の中で特に重要と考えられる品々が紹介された。例えば、源頼朝から伊東祐時を経て石見国の内田氏(益田氏の家臣)から益田氏へ献上されたという《太刀 銘成高》(鎌倉時代、京都国立博物館蔵、重要文化財)、益田宗兼が足利義植から拝領したという《白茶地桐竹文綾小袖》(図1)、雪舟等楊筆と伝わる花鳥画の中で唯一真筆と認められている《四季花鳥図屏風》(室町時代、京都国立博物館蔵、重要文化財)などがある。

次に中司氏により「益田家ゆかりの文化財とその伝来」と題した報告が行われた。

「益田元堯諸道具譲渡目録※」(1644年、東京大学史料編纂所蔵)をはじめ、益田家文書に記載された美術工芸品についての詳細な報告、益田ゆかりの寺社の文化財の紹介とともに、益田家の名物所持の背景についての見解が示された。益田家が足利義政より拝領し、千利休に「天下第一の茶壺」と絶賛されたという「益田壺」のエピソードや、益田氏の日本海交易を基盤とした海洋領主的性格についても言及された。

上記2名の報告の後には、共同研究員の間での意見交換があり、古文書・絵画・染織の各分野を跨いだ活発な議論が行われた。研究会の後には、雪舟等楊筆《益田兼堯像》(1479年賛、益田市立雪舟の郷記念館蔵、重要文化財)や狩野松栄筆《益田元祥像》(図2)など、益田家伝来品の調査がなされた。

また、研究会翌日の6月9日(日)には、益田市の実地見学や萩市の須佐歴史民俗資料館での調査も行われた。

今回の研究会を出発点として、引き続き益田家文書と益田家伝来品に関する調査・研究を進めていきたい。

※寛永21年(1644)に益田元堯が益田就宣に対して、牛麿(益田元祥)から譲られた家宝等を譲渡した目録。

(角野広海 当館主任学芸員)



図1.《白茶地桐竹文綾小袖》 室町時代
東京国立博物館蔵 重要文化財
出典:国立文化財機構所蔵品統合検索システム



図2. 狩野松栄筆《益田元祥像》
安土桃山時代
島根県立石見美術館蔵 重要文化財



研究会の様子